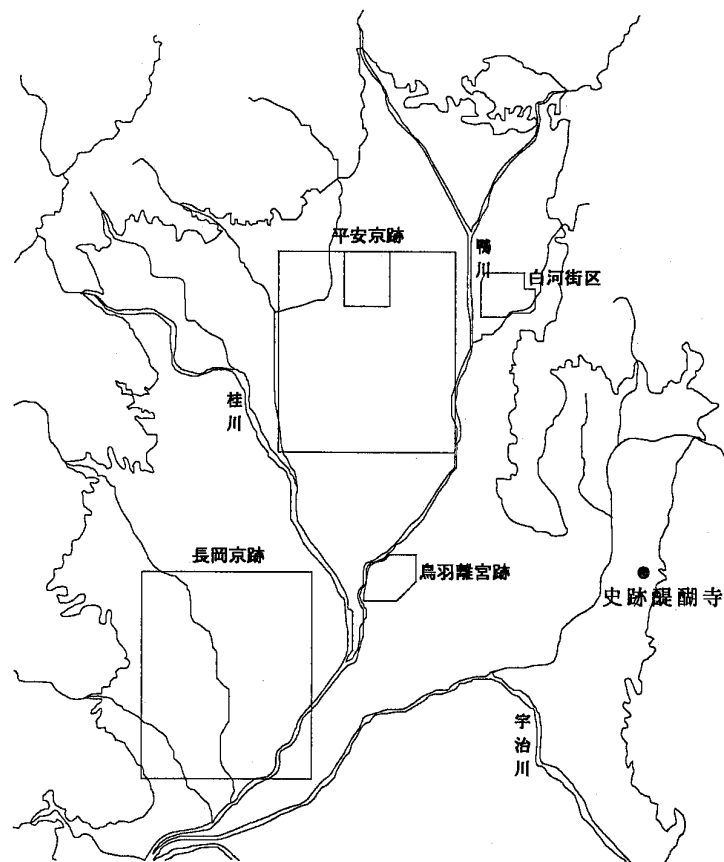


史跡醍醐寺境内発掘調査現地説明会資料



1998年2月14日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡醍醐寺境内発掘調査現地説明会

場所	京都市伏見区醍醐伽藍町
期間	1997年8月～継続中
調査面積	約1500㎡
調査主体	(財)京都市埋蔵文化財研究所

はじめに

醍醐寺は、平安時代前期にはじまる真言宗の寺院です。寺は、大きく上醍醐(山上)と下醍醐(山下)とに分かれています。上醍醐は、貞観16年(874)頃、聖宝によって創建されたといわれています。延喜7年(907)には、醍醐天皇により御願寺となり薬師堂などが建立されています。10世紀の中ころには、この上醍醐のふもとに下醍醐のはじまりとなる釈迦堂や五重塔からなる伽藍が造営されました。今に残る五重塔は、大修理を受けながらもその当時の姿を伝えています。

平安時代後期には、白河上皇や源氏の系統などによる御堂の造営が盛んにみられ、三宝院や大智院などと呼ばれる子院が、上醍醐や下醍醐の周辺に数多く建てられました。その後、一時期衰退しましたが、桃山時代にいたり、豊臣家の庇護のもと再び活況をていし、現在の三宝院書院や庭園が今に伝わっています。

醍醐寺の境内は、国の史跡となり、この中には特別史跡・名勝に指定されている三宝院庭園をはじめとして、国宝の金堂・五重塔・薬師堂・清滝宮拜殿・三宝院唐門・三宝院表書院をみることができます。これらは、1994年に世界文化遺産に登録されました。

本調査地は、下醍醐の伽藍のすぐ南西に位置し、子院の一つである光台院の東隣接地にあたります。調査区は、平坦地内を東西約50m、南北60mにわたりコの字状に設定しました。

今回の調査成果

近世の遺構については18世紀代と考えられる土蔵遺構と、その南に子院を南北に画すると思われる雨落ち溝などを検出しました。

中世についての遺構は石溜・土器溜などの土壌を検出しましたが明確な建物跡と確認できる遺構は検出できませんでした。

平安時代については、調査地では11世紀代から子院の造営がうかがえます。調査区を南北に画す11世紀代の東西溝が検出され、また12世紀代の建物跡とそれに連なる廊などの子院に関連する遺構を検出しました。

遺物は近世のものでは染め付け陶器の皿・椀や瓦質土器、中世には室町時代を中心とした時期の土師器皿や輸入磁器あるいは北宋銭、滑石製の鍋などがあります。そして平安時代後期から鎌倉時代前半には梵字を飾った金具や硯、土師器皿、瓦器椀などの土器や瓦類などがあります。

検出した平安時代から鎌倉時代の遺構

1) 建物跡

調査区の南端に近いところに粘質土と礫を用いて版築状につき固めた建物1の地業を検出しました。地業は検出した大きさが東西11m、南北13mの長方形です。建物の雨落溝は、南端、北側、東側で検出しましたが大部分は削平されていました。また、建物北側には階段と考えられる張り出し部を検出しました。建物の上部は15世紀代にほとんど削平されたようですが、一部礎石抜き取り跡と思われる痕跡がうかがえます。

また、建物1の西側から南北方向に延びる地業1があります。これから更にカギの手状に東西方向に折れ曲がって、拳大の礫を敷き詰めた建物2の地業があります。

2) 子院を区画する遺構

建物2から以北に南北の柱穴群があります。柱間は2.4mを測る柱列(柵1)と、2.1mを測る柱列(柵2・3)があります。これらは、建物などの方向と平行して造られています。子院を画する柵列と思われ、数回にわたり建て替えられたと考えられます。

前述した地業の下部には、法面^{のりめん}を形成した時の整地層^{せいちそう}があります。これは礫^{れき}敷^{じき}と土^{つち}を互層^{ごそう}に突き固め^{はちくじょう}版築^{はんちくじょう}状に平坦面^{へいたんめん}を造成^{ぞうせい}しています。その上面^{うへめん}には、補修^{ほしゅう}に伴う再整地層^{さいせいじそう}も確認^{かくにん}できます。さらに、その西側^{せい側}の傾斜地^{けいさつち}に子院^{しえん}の西^{せい}を画^{えが}すると思われる南北^{なんぼく}の溝^{みぞ}2があります。溝^{みぞ}2は、調査区南端^{ちうさくなんたん}約1.5mで途切^{とぎ}れています。

3) 東西溝

これらの遺構^{いこう}の下には幅^{あし}約3m、深さ^{ふかみ}約1mの11世紀代^{じゅういちせいだい}の溝^{みぞ}が東西方向^{とうせいほうこう}に掘^ほられています。なお、この溝^{みぞ}は12世紀代^{じゅうにせいだい}に人為^{にんゐ}的に埋^うめられて建物^{けんぶつ}1などが築^たかれたと考え^{かんが}られます。

まとめ

今回の調査^{ちうさ}で検出^{けんしゅつ}した遺構^{いこう}について、醍醐寺^{だいごじ}関係^{かんけい}の文献資料^{ぶんげんしりょう}を参考^{さんこう}に検討^{けんこう}してみると、下醍醐^{したご}の子院^{しえん}に関連^{かんげん}する堂宇^{どうう}が想定^{さうてい}できます。

調査地^{ちうさち}付近^{ひきん}が記^きされている文献資料^{ぶんげんしりょう}には、『醍醐寺新要録^{だいごじしんようろく}』「卷第11 妙法院^{みょうほういん}編^{へん}」^{注1}があります。それによると、妙法院^{みょうほういん}の敷地^{じき}は、「南大門大路^{なんだいもんおおじ}」より「西^{せい}」にあり、「清滝宮南大路^{しみづたきみやなんだい}」より「南^{なん}」とされています。また、「卷第16 妙法院超濟拜堂類^{みょうほういんちようさいはいどうたくい注2}」^{注2}においても「八足門^{やつあしもん}」（現在の仁王門^{におうもん}）への道順^{みちぐん}について「妙法院ノ棟門ヲ出テ西行^{むなかど}」云々とあり、調査地^{ちうさち}は醍醐寺^{だいごじ}の子院^{しえん}の一つである妙法院^{みょうほういん}と考えられます。妙法院^{みょうほういん}は、藤原惟信^{このぶ}により建立^{けんりつ}され、「一間四面^{いっけんしめん}の建物^{けんぶつ}」と「三間二面^{さんけんにめん}の廊^{ろう}一字^{いちじう}」があったとされ、各々^{それぞれ}「檜皮葺^{ひわだぶき}」であったと記されています。

今回の調査^{ちうさ}で検出^{けんしゅつ}した建物^{けんぶつ}1は「一間四面^{いっけんしめん}の建物^{けんぶつ}」に、東西方向^{とうせいほうこう}の建物^{けんぶつ}2は「三間二面^{さんけんにめん}の廊^{ろう}」に想定^{さうてい}されます。また南北方向^{なんぼくほうこう}の地業^{じえい}1は子院^{しえん}の西限^{せいげん}を画^{えが}する築地^{ついき}などの基礎部分^{きそぶぶん}と想定^{さうてい}されます。

注1 『醍醐寺新要録』「卷第十一 妙法院編」

一 願主事

慶延記云、願主正四位下藤原朝臣惟信之建立也、惟信之室者、...

一 棟數事

同卷云、妙法院一間廊一字二間各比皮葺

...

一 敷地事

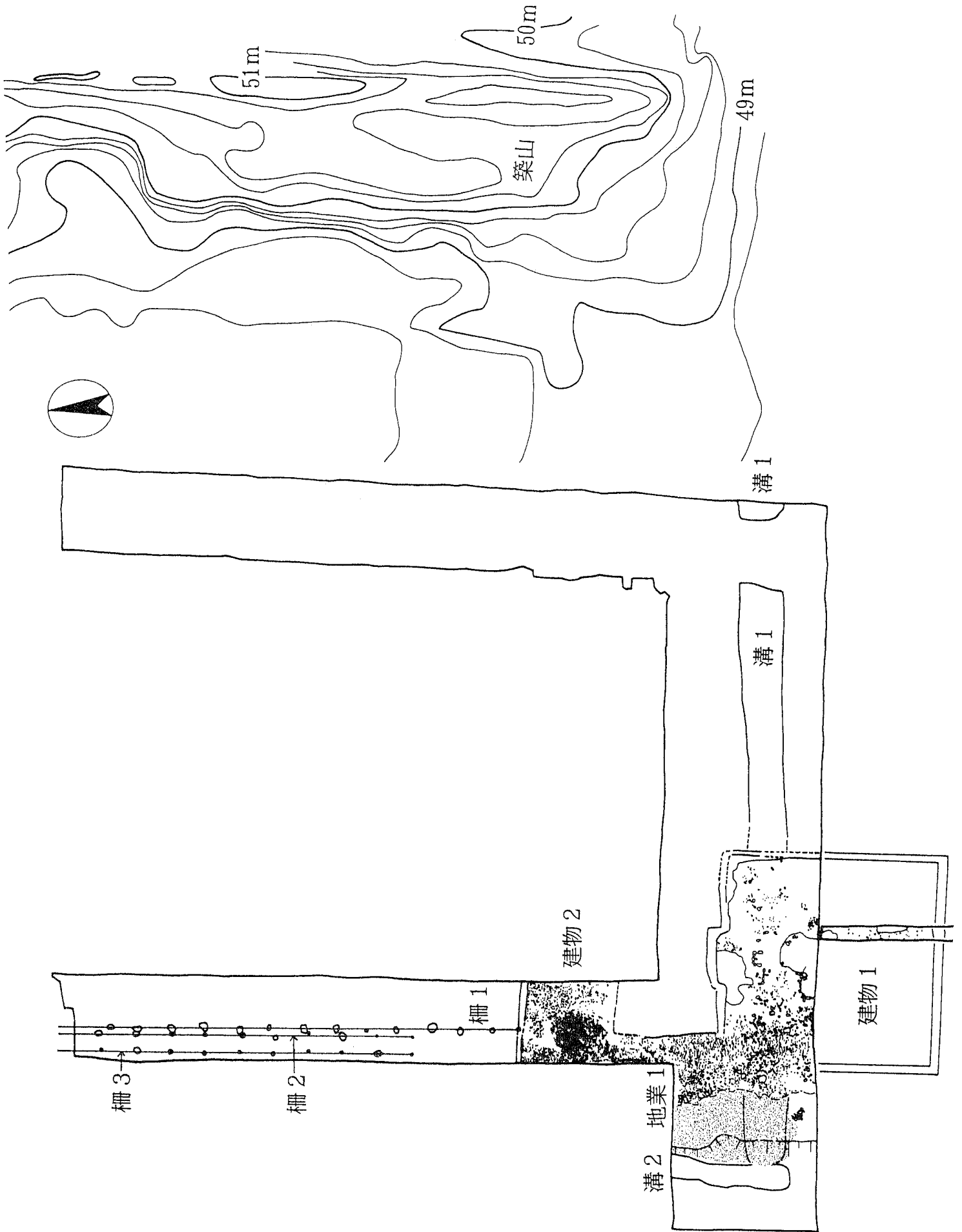
同卷云、此敷地者、本實相寺跡也。...

同記云、實相寺、願主并朽失不知之。但件敷地者、自南大門大路者西、自清瀧宮南大路者南也。...

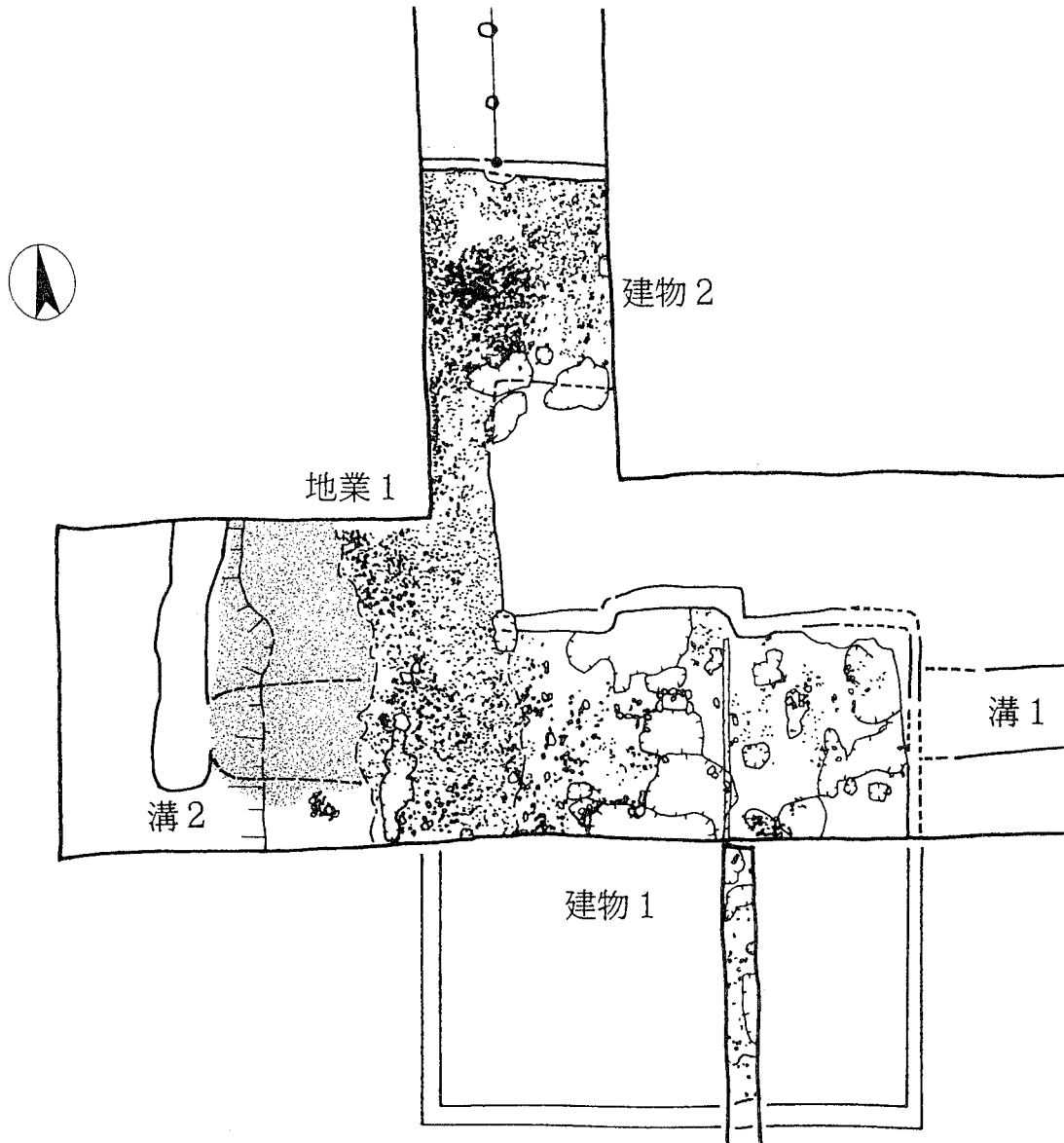
注2 『醍醐寺新要録』「卷第十六 妙法院超濟拝堂類」

醍醐寺供僧拝堂略記 超濟、妙法。院、近代儀。

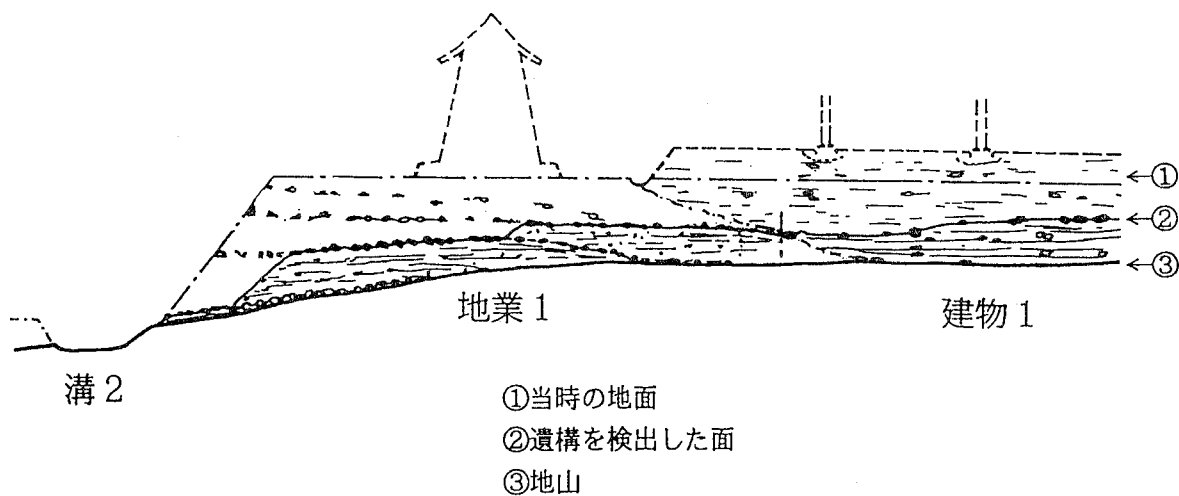
妙法院ノ棟門ヲ出テ西行、四辻ヲ北行、入ル八足門内、...



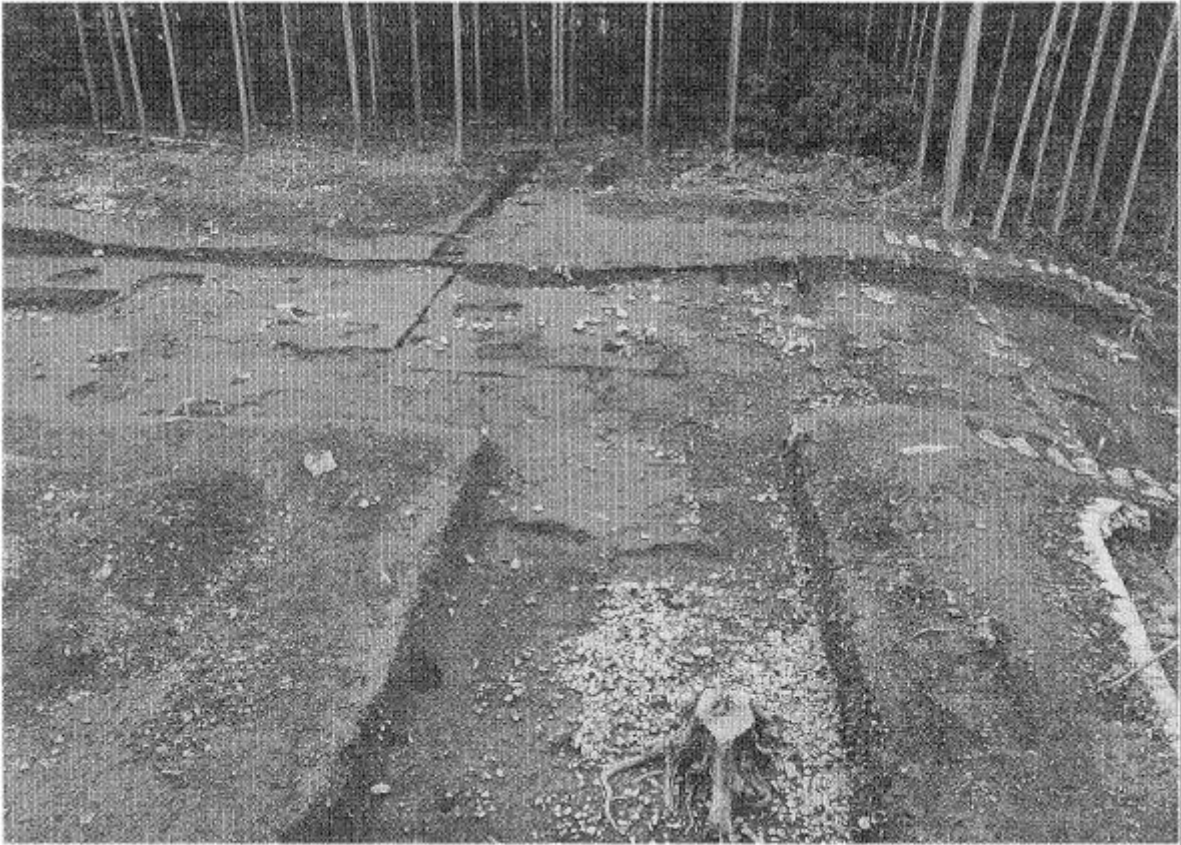
遺構全体図 (1:300)



遺構平面図 (1 : 200)



建物 1 と地業 1 の造成概念図 (縮尺不同)



建物跡全景（北から）



建物1全景（北東から）